

ヘルマン・ブロッホの『未知数』について

福 山 悟

人間は目的を持って生まれてきたわけではない。生活をしながら、自分で自分の道を探し当てなくてはならない。その道を簡単に見つけることのできる人間は稀である。人々は、様々な試行錯誤を繰り返し、自分の進むべき道を歩むことになる。その道を見出すことができた人間は幸せである。多くの人が、何も分らないまま、この世から消えていく。ブロッホの作品でも、不条理が描かれるが、なんらかの形で整合性が構築される。この点では、不条理を不条理として描き、人間に現実の厳しさを提示することが多いカフカとは異なる⁽¹⁾。ブロッホは、生の条理性を追求している。この『未知数』にもそうした彼の特徴が顕著に表れている。如何に、条理と不条理が描かれているか、その作品構造を確認したいと思う。

この物語は、主人公に父親が大きな影響を及ぼすという設定で描かれている。人間は、幼い頃は家族、特に両親に依存して生活を送らなければならない。両親が子供の未来を決定してしまうことも稀ではない。両親は人間の生活を規定してしまうのだ。この物語も同じような構造を有している。『夢遊の人々』第一部において、主人公ヨーアヒムに父親のパーゼノウ氏が大きな影響を与えた。また、『哀れな辻音楽師』のヨゼ

フは偉大な父親の枠から逃れることができなかつた⁽²⁾。そして、カフカの諸作品においても、父親は決定的な役割を果たしている⁽³⁾。この物語においても、父親が根源として、主人公リヒャルトの生活を規定することになる。

リヒャルトの父親は、「Nachtmensch」(夜人間)(4、16)であると紹介されている。「夜人間」は、外部の世界に興味を示さない。家族が揃っていた日曜日の午後、母親が外に出かける絶好の日和であるとの発言をした。それに対し、彼は、次のように言って母親の提案を拒否する。

『世界は我々の中で燃えている、外部で燃えているわけではない。』
(4、15)

彼は、はっきりとした形で、「外部」の拒絶を表明している。人間は、「外部」からの刺激よりも、内部を大切にすべきであるという考え方である。自分の内面を直視し、内面を豊かにすることは重要なことである。この考え方自体には問題がない。問題なのは、そうした自己の信念をもとに、どういう人間関係を構築していきたいのかを、しっかりと伝達していないことである。彼は、家族という権力機構の中で、彼は権力者として自分勝手に行動できる力を有しているが、家族に対して責任があるからである。

「夜人間」として、彼は「明るみに出たものの全てを拒否した」(4、15)だけではなく、外部世界をも拒否する姿勢を見せ、家族を唾然とさせる。その後、彼はあたかもその埋め合わせのように、長男であるリヒャルトを夜の散歩に誘う。野原まで行き、そこで花を摘んだ。リヒャルトは、皆のために花を摘んだと思っていたが、実際はそうではなかった。父親は、その花を河の中に放り込んで、『水の中の星だ』(4、16)と叫んだのである。父親は、花を花として活用しない。花を星に見立て、自

己満足している。世界を自分勝手に作り出している。リヒャルトが「明確なものは何もない」（4、16）と感じても不思議ではない。父親はリヒャルトにとって不条理そのものである。相互理解が可能な存在ではないことは明白である。

父親は、日常生活を拒絶しているわけではない。彼は、《役所》（4、15）に勤め、結婚もしているのだ。ただ、花の例でも理解できるように、彼は他の人間に心を開くことはなく、自分の内的世界に固執し、外への志向性は欠如している。父親は、本来、家庭内で子供たちが今後社会に出た時に生活できるように、指導しなくてはいけない。善悪の観念を教え、社会的な生活を営めるように、躾をしなくてはいけない。父親に求められているのは、そうした社会的な父性である。ところが、この父親は自分の内面世界に沈潜し、子供たちを導こうとはしない。無責任な父親である。彼は、子供たちにとって「不気味な」（4、15）存在でしかなかった。父親は人生のモデルとして全く機能しなかったのだ。親が家庭内で生きるための基礎教育をしないと、子供たちは社会に対応することが困難になる。ピサレックは、父親に関する記述が十分ではないことを指摘している。

「なぜ、彼が早死にしたか、どんな職業に就いていたか、彼の外見はどうだったかというような父親に関する多くの重要な情報が欠落している。」⁽⁴⁾

「重要な情報が欠落している」のは、そうした「情報」がこの物語には不要だからである。父親がどんな人間だったかを示す必要はなかったのだ。父親が父親として機能していなかったことを示すだけで充分だったからである。

子供たちは、社会に出て、自分自身をコントロールすることが難しく

なる。アフリカに出かけて行方知らずになっているものもあるし、家を飛び出してしまった子供もいる。家に残っているのは、リヒャルト、ズザンネ、オットーの3人。父親は、早く死亡した。謎のまま舞台から姿を消すことになる。父親の死は、リヒャルトにとって救いとなった。

『夢遊の人々』第一部において、父親であるパーゼノウ氏は否定的な存在。ただし、息子ヨーアヒムは父親の「死」に自己責任を感じ苦しむことになる。ところが、この作品では、悲しみや責任は描写されていない。父親だけが完全に別の存在として描写対象となっている。普通の存在ではない。父親が否定されるべき存在として描かれているのは、『夢遊の人々』の第一部と同様であるが、生き生きとした人間関係は表現されていない。ただひたすら、否定されるべき存在としての父親が描かれていることになる。『罪なき人々』においても、父親は不在。メリッタを育てたのは、祖父である。ブロッホの作品において、父親がモデルとして登場する作品は存在しない。歴史の連続性が否定されているのではないか。価値崩壊という視点で歴史を考察しているブロッホにとって、社会の中樞を担うべき「父なるもの」が機能していないのは当然の結論であるのかもしれない。つまり、この物語の根底には、リヒャルトの父親が不在ではなく、社会に「父なるもの」が機能不全に陥っているという認識が存在しているのではないか。

先達の役割を果たしていなかった父親がいなくなることで、彼は自分で自分の道を選択できるようになった。そして、リヒャルトは冷静に自分の世界を見つけるだけの力があつた。その際、彼が継いだのは学校であり、数学であつた。

彼は、自分を守るために、「学校や勉強に歯をくいしばってしがみ付いた。学校や学校の規則性に彼は少なくとも子供の時に奪われてしまった明晰性の一部を見出すことができた。」(4、17-18)

特に、彼を安心させたのは、「数学の授業」(4、18)であった。数学は、明晰な世界。ルールがあり、依拠できるものがある。論理の世界であり、整合性を求める世界。世界は元々不条理。リヒャルトは、父親の不条理な世界から独立するために、合理の世界を選択したことになる。不条理に対する免疫がないことになる。不条理の世界は計算できない世界であり、恐怖の対象となる。

才能にも恵まれていた彼は、大学に残り、数学の研究を続けることになる。父親の指針がなくても、自分の力で、自分の道を歩むことができた。彼は数学の世界に自分の世界を見出し、精神的に安定して生活が送れるようになる。彼に、転機が訪れる。天文学の助手に採用されることになったのだ。それまで、彼は夜空を避けていた。父親の不気味さを思い出すことになるからだ。ところが、天文学の助手採用人事があることを知った彼は、積極的に自ら名乗りを上げたのだ。経済的にも、将来的にも自分の人生のプラスになると考えたからだ。このことによって、ようやくリヒャルトは父親の呪縛から解放されることになる。父親の影響で、自分の存在を守るだけの、いわば受け身の人生だったものが、自分で自分の人生を規定できるような状況になったのである。しかし、リヒャルトはまだ自分が何をしたいのか分らない状態であった。数学にしても、天文学にしても、いわば逃避場所であり、自分の身を守るためのものであり、現実や人生に積極的な意味を持つことはなかったのである。目標・目的が見い出せない状況だったのである。そのことを彼は、妹ズザンネとの比較で実感することになる。

リヒャルトの妹ズザンネは早くから精神的に自立している。経済的には独立していないが、彼女は自分の進むべき道を決めているからである。彼女は、修道院に入る準備をしている。神との生活を選択したのである。リヒャルトは、そうした妹との共通点を理解している。

「奇妙なことだが、リヒャルトが宗教的な振舞をしなくても、また彼が宗教的なましてや教会の問題にまるで関心がなくても、精神的なものや象徴的なものの具体への変貌は彼が妹と共有している共通の基盤であった。」(4、28)

ところが、大きな相違が存在しているのだ。ズザンネには、キリストの花嫁になるという「はっきりとした目標」(4、30)があったが、リヒャルトにはそうした確たるものは存在しないのである。彼は、数学の論理的な世界に救済されたが、人生をどう歩んでいけばいいのか分らず、暗中模索していた。

「数学は、確かに全世界を総括し、それどころか全世界を越えていくことにきわめて適していたが、まだ前哨戦に過ぎなかった。彼は、数学で何かに到達しようと思っていた、キリストがキリストに仕える教会の外にいるように、数学の外部にある何かに到達しようとしていたのだ。しかし、数学に内在している目的を越えることはなかった。どこに、目標があるのか？またこの目標の明瞭さはどこにあるのかと彼は思った。」(4、30)

彼は、数学が前にあるものであり、その背後に何かがあることを感じている。しかし、それが何であるかは分からない状態であった。しかし、天文学(物理学)を仕事にする決心をすることで、彼は、ようやく自分の望んでいたことが理解できるようになったのである。それは、論理(数学)の応用である。数学を元にして、現実を支配することこそが、彼がしようとしていたことであると実感できるようになったのだ。ここでようやく逃げていた現実に向き合うことができるようになったのである。手にした武器は論理であり、数学であった。その武器を手にして、リヒ

リハルトは現実支配を始めることになる。それゆえに、他者に対しても批判的になることができるようになるのだ。物事の論理を知ろうとしない人間に対して厳しい態度を取るようになる。

少し余裕のできたリハルトに恋のチャンスが訪れる。しかし、女性は、彼にとって「夜人間」(4、20)であり、彼は恋に情熱的になることはできない。「明瞭さ」の世界に身を置く彼にとって一番重要なのは、認識することであり、愛が客観的に認識できるものではないことを知っているからである。しかし、リハルトは愛の感情を無視することはできない。彼の認識と愛との葛藤が始まることになる。彼は、愛を認識し、愛を合理的に判断しようとする。しかし、愛が何であるかを示すことはできない。愛に進進できないのは当然である。認識>愛という図式から脱却できないからである。他者への志向性ではなく、自己保存が優先されているのだ。認識できない領域に踏み出すことができない。自分の領域を離れるのは不安だからだ。自分の事が第一で、他者との関わりを拒否したい気持ちが強い。自分のことだけに関わるのは嫌で、すぐ他者と結び付きたいと思う人は多いが、リハルトはそうした人間ではない。あくまでも自己完成を目指しているのだ。しかし、勿論愛を経験したいという気持ちもある。ただ他者への志向性を認めても、猪突猛進はできない。未知の領域に足を踏み入れることに不安を感じるからである。リハルトが愛に対して躊躇するのも、当然であろう。彼とイルゼの愛に必然性・因果律・法則性は存在しないからである。二人の愛は偶然の産物であるからだ。

「愛という言葉が突然脳裡に浮かんだ：彼は恐怖を感じた。しかし、彼は愛をどのように考えればいいのか検討もつかなかった。」(4、98)

その状況が変化したのは、弟オットーの死である。オットーは自分を確認することができなかった。彼の死には家族が大きく関わっている。母親は、父親の死後、子供たちが自分の存在の一部であると実感するが、子供たちに社会性を与えることはできなかった。彼女は、リヒャルトに父親代わりを依頼したのだ。

「今からはお前が父親の代わりになってもらわなきゃ。」(4、66)

母親には親としての自覚が欠如していたと言わざるを得ない。彼女は田舎の出身で、都会に嫁いできた。そして「夜人間」である夫と幸福な結婚生活を送ることができなかった。夫の死後、子供たちに対する気持ちに変化が生じたが、夫の影響が残り、子供たちを自分で見守るべきだという意識が十分ではなかった。彼女は自分が被害者であるという意識が強かったからである。夫の影を払拭することができなかったのだ。そして、あろうことかオットーの友人であるカールに対して彼女はしてはいけないことをしてしまったのだ。彼女は、カールに「彼女がオットーに対して示したものよりも、いわばもっと楽に使え、より自由な母性」(4、86)を示してしまった。オットーがショックを受けるのは当然のことであった。

彼女はカールが田舎の出身であることに共感し、都会の祖父母の所へ放逐された境遇に自分の姿を重ね合わせたのだ。ブロッホが、「父なるもの」が頼りにならないことを認識していることについては前述した通りである。「母なるもの」も同様に子供の成長に寄与しないことがここで明瞭に描かれている。母親のカタリーネは、オットーの内面の動きに注視することがなかった。「母なるもの」の無力さが露呈している。

オットーは、画家になることが希望であったが、家庭の経済状況がそれを許さない。家を飛び出す勇気もなかった。「銅板彫刻」を学ぶなど

して、自分の道を模索したが、結局、彼はリヒャルトやズザンヌのように自分の道を発見することが出来なかった。友人のカールに対して家族が親切すぎるのも、オットーの気持ちを暗くさせる。すでに、彼は母親のカールに対する態度を見て、「嫉妬と不愉快さと不安」（４、86）を実感したが、それがもっと酷くなる。カールは職業学校で数学が必要であった。しかし、カールには数学の力がなかった。オットーは彼を助けようと、兄リヒャルトを頼ったが、オットーが思っていた以上に、家族がカールの面倒を積極的にみようとしたのだ。オットーが落ち込むのは当然であった。

「どんな残酷で恐ろしい力が彼を捉え、全ての事において彼に敵対したのか？ そうだ、それは人生そのものであった、人生自体であった、人間が晒されているこの最も恐ろしい力であったのだ。」（４、112）

オットーは、「除け者にされた」（４、112）と痛感することになる。

「オットーは皆が密かに自分だけを除け者にしようと結託しているように思えた。何事にも、皆が彼に対して結束していると感じたのだ。」（４、113）

オットーは、自分を追い詰めていく。家族がカールを大切にするのは、カールがオットーの友人だからである。ところが、オットーはそうは感じなかった。彼にはそれだけの精神的な余裕がなかったからである。

リヒャルトは父親の死については責任を感じる必要はなかった。ところが、弟の死は彼の内面に衝撃を与えた。本来は弟の父親代わりを務めなくてはならなかったが、彼はそれを拒んでいた。自分のことで精一杯だったからである。オットーは家族から除け者にされたと誤解して、自

分の未来に悲観し、事故死を遂げる。リヒャルトは責任を感じる。死と対決せざるをえなくなった。父親代わりとして、弟をしっかりケアしなかったことに後悔の念を覚える。死の力が彼の領域に入り込んできたのだ。進んで死を認識しようとしたわけではなかったが、死の存在が不可避であることを実感せざるをえない状況に追い込まれたと言えるであろう。そのことが、リヒャルトを全体認識に導く契機となる。客観的に証明できる領域での認識に固執し、その領域から離れることに不安を感じていた彼であったが、弟の死はそうした彼を遠くへ連れ出すことになるのだ。死を受け止める必要が生じた瞬間である。そして、客観的・合理的に認識できるもの以外の存在を認めることになる。それが、愛への道にも通じるのだ。愛を求めるだけでは恐らく彼は愛に辿り着くことはできなかつたはずである。愛はこの場合死の介在があつて、初めて成立することになるのだ。

「弟の遺骸の前で彼の存在の本来的な認識の源泉が明らかとなり、彼は合理的・科学的な認識がただ単により大きくて同時により純粋な認識の一部にすぎないことを把握した。」(4、245)

リヒャルトが目指していたのは、あくまでも認識の世界。認識することによって安心を得ようとしていた。そこからは一步も出たくないというのが本音であつた。ただし、頭の下にある「心」は、愛を求めている。頭は愛に突進することを命令しない。頭と心は分離されたままである。そうした時に、弟の死。その死は彼の分離していた頭と心を結びつける。頭と心が結ばれることで、心が自由に動き出し、愛への道を進むことが可能となつたのである。弟の死は他者への志向性を喚起したと言えるであろう。自分の狭隘なカプセルから出なければ、弟を悼むことはできない。弟と向き合うことはできない。無意識にリヒャルトは自分の領域か

ら抜け出たのだ。いわば心の真実を知ることになる。それが、愛に応用されることになるのだ。

リヒャルトはブロッホの作中人物の典型の一人。死の不条理性に敏感な人間であった。

「全ての現象を包括できるほどの認識を得たものは、不死である。内面的に不死だと言える。」(4、99)

彼の目標は死の克服。それを認識という武器で行おうとしていた。そして、それ以外は拒否していたのだ。

「因果や法則の関係から外れたものは、……罪のあるものだ。」(4、84)

しかし、全体を認識することができずにいた。ところが、弟オットーの死が、リヒャルトを全体性認識への道に導くことになったのである。彼は、不条理としての死を受け入れざるを得なくなったのだ。

「死に対してはいかなる人間の力も及ばない。」(4、134-135)

この認識の持つ意味はきわめて大きい。死を因果律の中に組み入れることをせず、運命として、つまり力の及ばないものとして認識することになるからである。死は認識の領域下で支配できるものではないことを認めたと言えるであろう。通常認識では、認識したものは、人間の力で支配できるものとなる。ところが、死は異なる。死の認識とは、死の存在を認めることであり、認識したからと言って、死をコントロールできるわけではない。死は克服されるべきものであった。しかし、死の克

服は不可能であることを実感する。不可能であれば、受け入れるしか方法はない。こうして、愛も認識不可能であるが、受け入れるべきものとして認知されることになる。

リヒャルトが弟の死に際して、得た知・認識とは、個別の死を超えたものであった。リヒャルトは「世界の全体性」(4、135)を認識できたと記されている。彼は、弟の死によって「世界の全体性」への道を歩むことができたのだ。ブロッホの考え方では、人間は「神」の子であり、個別存在が消滅すれば、「神」のもとに戻る。こうした考え方が背景に存在するために、リヒャルトは、弟の死を介して「世界の全体性」、つまり「神」の存在を実感できる、認識できることになるのだ。そしてこれが生きることの支えとなる。現実世界をどう構築していくか、どのように自己実現をしていくかではなく、如何にして「世界の全体性」を体験できるかが根本的な問題となるのだ。こうした個人が全体を感じることをブロッホは「神秘体験」と呼んでいる。それこそがブロッホにとって生の意味なのだ。

合理認識に留まっていたリヒャルト。愛も死も彼には無縁なものであり、認識の対象とはなっていなかった。愛への気持ちは高まっていたが、他者への一步を踏み出すことができなかった。愛は恐怖の対象であったからだ。ところが、弟の死に直面し、リヒャルトは死から逃れることができなことを知るようになる。死を受け入れることで、もう一つの不条理である愛も受け入れ可能となったのだ。そして、「全ての現象を包括できるほどの認識」を手に入れることができたのだ。リヒャルトにおける死は、自己の死の認識ではない。自分が本来面倒を見る必要があった弟の死である。彼は、弟を通じて死の意味を知るようになる。しかし、この死は単なる死に留まらない。この死は愛と結びついている。リヒャルトは愛する人の死を体験したのだ。そして、そこから死と愛が繋がっていることを知る。

「死の神聖さは愛である：死と愛が一緒になって初めて存在の全体を形作ることになる。全体認識は死に存在している。」(4、136)

こうして、不条理としての死あるいは愛が認識対象と化し、全体性という名の下に包括されることになる。「以前押しつけられていた心の領域を人格の中に統合し、生のイデオロギーの構造を⁽⁵⁾変える」ことに成功することになる。死が全体性を導き、愛もまた死に介在されることになる。愛ではなく、死が全体性への道に通じているという考え方に注目すべきである。愛とは人と人を結びつけるもの。他者への志向性から全体への道が切り開かれるのでないのだ。死は運命。ブロッホは、運命との対決を自己の中心に据えている。死が根幹に存在しているのだ。『夢遊の人々』においても、また『ウェルギリウスの死』においても全体性認識には死が介在している。ブロッホにおいて死は人間存在を考える際に、最も重要な役割を果たしているのだ。ブロッホは終生宗教体系に固執した。それは、民主主義の伝道者となっても変わることはなかった。それは、宗教体系が死と対決しているからに他ならない。

「全ての宗教的なものは、死との対決である。」(10/1、46)

カフカが生の不条理性の代表であるとすれば、いわばブロッホは死の不条理性を主張する代表選手である。カフカの作品には「なぜ生きなくてはならないのか？」という問いかけがあった。それに対しブロッホは、死の克服が最大のテーマなのである。

この作品において、リヒャルトは死を自己の中に取り入れることに成功し、「生をその全体性において把握すること」(4、136)ができた。しかし、リヒャルト(あるいはブロッホ)の試みは決して建設的とは言えないのではないか。認識作用がより良い社会構築を目指しているもの

ではないからである。認識は自己満足のためにあるのではなく、より良い社会構築のために存在している。リヒャルトにはこうした考え方が完全に欠落している。認識そのものが問題ではない。認識を現実世界に應用することが重要である。こうした宗教的な体験に魅せられた人間は古来数多く存在した。ブロッホもその一人である。親の愛を受けてのびのび生活することが理想と考える人もいる。金銭的な苦しみがなければ幸せという人もいるだろう。また愛する人がいれば何もいらぬという人も多いだろう。ブロッホにとっては、神体験が重要なのだ。

「あらゆる純粋な認識努力は最終的にプラトンのような世界観を目指している。つまり、経験的な世界が完全に認識する自我によって処理され、明らかになる世界観である。」(4、244)

ブロッホは世界を不条理だとは考えていない。整合性のある認識可能な世界だと把握している。こうした認識作用の過大評価が認識全能の思想を生むことになる。ブロッホは現実の多様性ではなく、一元化された理念(「神」)から出発している。「神」から出発した思想には矛盾はない。当然、不条理は存在しない。「神」は不条理を許容しないからである。勿論、これは客観的な現実世界の説明ではなく、あくまでも個人的な思想である。ブロッホはこうした考え方を生かすことができたのである。そして、その信念の重要性を自覚しているので、小説やエッセイを通して自分の思想を広めようとした。その信念を支えることになったのが、宗教体系である。「神」の体系は再生すると考えている。キリスト教の宗教体系が瓦解しても、いずれそれに代わる宗教体系が誕生すると信じていた。政治や経済の問題に積極的に関わってもそうした姿勢は変わることはなかった。⁽⁶⁾

註

テキスト

Hermann Broch: Kommentierte Werkausgabe

Suhrkamp Verlag

Herausgegeben Paul Michael Lützeler

(引用後の括弧内の数字は巻数・頁数を示している。)

- (1) 『変身』においては、主人公は虫に変身するが、その理由については作品内では説明が一切ない。変身した主人公は虫のまま死んでしまう。人間を虫に変身させた不条理は不条理のまま物語は終わる。社会の中の不条理を描いたのが『審判』である。主人公は明確な理由もなく逮捕され、一年後処刑される。個人が社会から受ける不条理が主人公を圧殺することになる。
- (2) 主人公は知的処理能力が不十分なため、高級官僚の父親から勘当され、放逐される。しかし、主人公は父親を恨むことはない。父親が課したノルマを果たせなかった自分を責め続ける。主人公は、父親の訃報に接して、気を失ってしまう。それほどまでに、彼は父親に依存していたのだ。
- (3) 『判決』を例にとろう。この作品には、主人公の父親に対する愛憎が活写されている。父親を愛しながら、憎まざるをえない心が見事に描かれている。主人公には友人や婚約者がいるが、父親との関係が全てなのである。
- (4) Pissarek, Markus: „Atomisierung der einstigen Ganzheit“—Das literarische Frühwerk Hermann Brochs, Martin Meidenbauer Verlagsbuchhandlung, München, 2009, S. 35
- (5) ebd. S. 148
- (6) 拙稿を参照：ヘルマン・ブロッホにおける民主主義について 愛知学院大学語学研究所紀要第37巻第1号（通巻38号）、pp. 3-25

